

平成 26 年度特別養護老人ホーム「はなの家とむろ」事業報告

今年度は平成 27 年度に控えた介護報酬改定および厚木市第 6 期高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画を見据え、改定により混乱を来さないようにすること、法人として今後どのような方向で活動していくことが必要かを検討しながら運営を行った。その中で、現状のユニット体制では受け入れが困難な利用者像や法人として地域に根ざしていくために何をしたらよいか等方向性は見えてきたと考える。

平成 26 年度の施設目標に沿って総括および年間を通しての実績を報告する。

1. サービスの質を向上しよう

利用者の健康診断を実施し健康管理に万全を期すとともに、生活に潤いを与えられるような活動や行事を増やし、ご家族にも参加・協力を促すことでより強い信頼関係を構築できるように取り組んだ。

法人職員として模範的な行動のできる職員の育成を目標に、職業倫理・法令遵守・施設理念等の研修を行い、特養の役割や社会福祉法人の使命の理解・啓発を行った。また、介護相談員やボランティア等外部の方々の意見を伺い運営に生かせるように努力した。

2. 専門職の力を地域に活かそう

ユニットリーダー研修や喀痰吸引研修に職員を派遣し、業務に生かせる資格取得を支援した。

地域からの要請等により職員の派遣を行い、地域活動に積極的に参加した。また、南毛利地域包括支援センターと共催で地域講座を行い、認知症サポーターの養成に貢献した。

3. 安定した運営を目指そう

(1) 入居者のスムーズな受け入れ

① 26 年度ベッド稼働率平均 97.6%。施設内看取り 28 名。入院後死亡 2 名。退所 2 名。平均介護度 3.79。

3 月末現在入居待機者 91 名。

② 昨年度 (98.5%) より 0.9%低い稼働率となったが、入居者の入れ替りも 1.5 倍に増えており、介護度の高い方の優先入所や空いた部屋と入居者の組み合わせ等入居後の安定した生活の保障のためにはやむをえないと考える。

(2) ショートステイ新規利用者の獲得とリピーターを増やし、稼働率 80%を目指そう

① 26 年度ベッド平均稼働率 74.0%。平均介護度 3.11。

② 気候の安定している 4・5・10・11 月の稼働が伸びず、その他の月は 70%以上の稼働率を維持できた。これは特養の入居待ちやミドルステイ利

用者を積極的に受け入れてきた結果でもある。しかし、次年度はロング・ミドルステイは介護報酬上減算となったため、運営方法の検討を行っている。

(3) 特色を出し選ばれるデイサービスとなり、稼働率 60%を目指そう

- ① 26 年度平均稼働率 50%、1 ヶ月平均 247 回。平均介護度 3.2。
- ② 近隣に同様の事業者が多い中、目標の 60%を達成することはできなかったが、徐々に稼働率を上げることができた。利用時に作製した作品展の開催や他に受け入れ先のない重度の利用者を積極的に受け入れたことによるものとする。

平成 26 年度 各部署総括

【 介護部・ショートステイ 】

- 1) 「居室担当性の確立と担当者主体での 24 時間シート及び介護計画の策定・実施」を H26 年度の目標に掲げて実践した。施設全体としての事業報告にあった通り H26 年度の退居者が 32 名あったため、新たに 32 名の入居者に 24 時間シートと介護計画の立案に取り組んでいる。加えて、継続入居されている 56 名の方についても評価日時を決めてシステム的に見直しを行うよう心掛けた。
多職種参加で行う施設サービス担当者会議は年間トータル 151 回。うち、家族同席での会議が 2 回、看取りケアに関するものは 23 回となった。
その他、介護部内や介護・看護・リハビリテーション職員とのカンファレンスが 760 回以上となる。
- 2) H26 年度の研修実績として、施設内研修は年 12 回開催。施設外では三思会グループの育成研修に 12 名が参加し、その他外部研修に 11 名が参加している。また、厚木愛甲地区福祉施設連絡会や厚愛地区医療介護連携会議が主催する研修にも参加している。

【 看護部 】

- 1) 他職種との連携・協働の推進については、朝の申し送りやミニカンファレンスを利用し、利用者の問題点や体調の変化について介護職と決め細やかな対策を考えることができた。また、看護部内で毎日カンファレンスを行い、利用者の情報を共有し、他職種に対し看護部としての働きかけができた。利用者の安全に配慮し、遅番体制を敷き吸引や緊急時に備えた。
- 2) 専門職として情報やスキルを利用者・家族・地域の方々に還元するという目的で、研修には積極的に参加し、施設内では感染・看取り・急変時の対応などの研修を実施した。また家族、地域に向けて医療情報に関するしおりを年 3 回発行した。地域活動として、防災訓練、地域のスポーツ大会の救護などに参加した。
- 3) 利用者のスムーズな受け入れの対応を見直すという点については、内服薬

などの整理を行い、過不足の対応及び管理などの業務改善を行った。入居時の看護部としての説明マニュアルの見直しは次年度につなげる。

【 生活支援課 】

○リハビリテーション科

- 1) 質の高いリハビリテーションを提供できるようにしよう。
 - ①介護技術についての施設内研修講師を4月に務めた。また、新入職者に対する介護技術の研修を随時行った。外部研修ではスタッフとして講習に参加、運営、講師を行っている。
 - ②はなはな体操、四季倶楽部について。はなはな体操は他職種、各ユニット職員の協力により半数以上は参加している。一時お休みになることはあったが、おおむね予定通り実施できた。四季倶楽部の参加率は1回当たり平均8.27名(全22名)。季節ごとの作品制作や歌等を施行。脳トレーニングなども行い、脳の活性化などを促している。入居者から期待する声も聞かれており、今後も継続していく。
- 2) 理学療法士・作業療法士としての専門性の役割を強化し、リハビリ専門職がいることをアピールしよう。
 - ①利用者についての情報交換の時間を適宜設けた。担当ユニット以外でもPT・OTとしての専門性を発揮・相談し、提供できた。
 - ②デイサービス・ショートステイ利用者の自宅訪問やサービス担当者会議に可能な限り参加し、情報共有を行った。
 - ③三思会リハビリテーション科との連携は3ヵ月に1回ワーキンググループ会議があり、4施設間での話し合いを行っている。他の居宅介護支援事業所、リハビリテーション提供施設との情報共有は実施できなかったため、次年度実施していく。
 - ④年に1度「はなはな健康塾」を開催。H26年度は地域包括支援センターからの依頼により地域のミニデイで体操などを行った。今後も地域に貢献できるように定期的に参加・開催していきたい。
- 3) 利用者や家族のニーズに合わせた個別機能訓練計画書の作成と提示を100%実施していこう。
 - ①事務所の協力もあり、個別機能訓練計画書は家族に説明し、ニーズに聞きながら説明ができていく。今後も継続する。
 - ②施設サービス担当者会議への参加から他職種からの情報を得て、計画書に反映させていく。
 - ③ご家族に伝わりやすいように、計画書提示の差異には専門用語は使用せずに説明を行っている。
 - ④ユニット会議への参加はH26年度はできなかったため、日程を見ながら可能な限り参加していく。
 - ⑤リハビリ時の様子など嘱託医及び看護師に説明を行っていた。今後利用者のリスク面などを看護師を通じて、もしくは直接嘱託医に情報を得ていくこととする。

○栄養科

- 1) 夢未塾に参加したことで、他職種への説明等コミュニケーションの取り方

をより注意深く考えるようになった。

- 2) 食の楽しみを提供するため、委託業者との連携を強化し、個別対応・イベント食の対応を行ってきた。
- 3) H27 年度の介護報酬改定から内容の変更のある経口維持加算の算定に向け、書類などの整備を開始している。

○相談科

- 1) 利用者・家族のニーズを引き出し、アセスメント情報を発信することでより良いチームケアに貢献しよう。
 - ・ミーティングなどを通じ、記録情報の統一を図るよう努めた。また、生活相談員から積極的に利用者・家族、関係機関に情報提供を行うなどの働きかけを行うことにより、相手のニーズを引き出すように努め、得られた情報や声を他職種に積極的に還元することでケアプランの充実に役立ててもらえるよう働きかけた。
 - ・利用者満足度調査では、今年度は各サービスごとで実施することができた。また、家族交流会も他職種の協力も得て開催することができた。
- 2) ソーシャルワークの専門性の向上に努め、より良い相談業務を行えるようにしよう。
 - ・三思会ソーシャルワーカーと協働し、職能内での研修計画やラダー（課業）の検討を行った。次年度実施し、内容の精査を行っていく予定である。
 - ・施設内外の研修に参加を行った。具体的にはグループスーパービジョンの定期的実施や神奈川県医療社会事業協会の研修担当役員を行うことで、教育的効果が得られた。
 - ・実習受け入れに関しては関係教育機関へのアプローチを行い、H27 年度には受け入れ開始ができる見込みである。
- 3) 地域や関係機関のニーズを発掘し、より良い形でサービスにつなげられるようにしよう。

適宜、ケアマネジャーなど関係機関と利用者に関する情報を提供し、積極的にサービス担当者会議への参加や訪問の実施を行うことで、利用者ニーズを把握するよう努めた。反面、9 月以降 1 名欠員があり、基本業務の遂行（利用相談）を優先せざるを得ない状況であり、関係機関への訪問は行うことができなかった。次年度は人員補充ができたため、施設の PR のため関係機関への訪問も積極的に行っていきたい。

○事務科

- 1) 業務の見直しを行い、個人が担当している仕事と皆で共有できる仕事とに振り分けることができた。
- 2) 全員で共有する仕事はミーティングで申し送りを行い、科内全員ができるよう心がけた。目標では月 2 回のミーティングとされていたが、なかなか時間を取ることが難しく、月 1 回になってしまったためなるべく普段から科内でコミュニケーションを取るよう勤めた。また H26 年度は 1 名療養のため 20 日間の欠勤があったが、科内で申し送りを確実にし、他部署の職員の協力を得て滞りなく業務を遂行することができた。
- 3) 今後も月 1 回ミーティングを行い、科内で共有する仕事は引き続き申し送

りを行い、誰かが休んでも他の人がフォローできる体制を作っていく。各々が仕事の手順などを見直し、業務マニュアルを完成させる。また、4月より職員向けに発行している「とむろ通信」に職員に伝えたいことを載せ、職員全員に周知し情報を共有していく。

○デイサービス

- 1) 利用者増加に向けて、
 - ・送迎区域を多少超えても、乗車時間・体力等を考慮し利用可能と判断した方を積極的に受け入れる努力を行った。
 - ・入浴の提供が週3回可能かシュミレーションを行い、希望や必要のある方に対し入浴の提供を行った。デイサービスの宣伝効果につながり利用者・ご家族に喜ばれたが、機械浴の利用者の増加により通常業務が遅れがちになった。今後は午後入浴の実施や利用時間の延長を考える時期になったと考える。
- 2) 医療依存度の高い方の受け入れについて、
 - ・介護職員も医療知識を身につけ、透析者のシャント体外刺入型の利用者の入浴介助方法を理解し、安全に入浴介助・消毒介助を行えるようになった。
 - ・医療依存度の高い利用者は体調を崩しやすく、入院することも多いため稼働率減の原因となっている。
 - ・喀痰吸引・経管栄養介助の資格を1名が取得した。
 - ・重度認知症に対する介護職員の理解度も上がっており、高度認知症の利用者が落ち着いて施設で過ごせるようになった。
 - ・今後の課題として、高次脳機能障害の利用者への対応に苦慮している。
- 3) アセスメント・ケアプラン・チームケアについて、1年かけて通所介護計画書に力を入れ文章もわかりやすくなってきた。モニタリングもケアマネジャーに返送できる体制となり、デイサービス内で上手に循環をするようになった。反面、ケアマネジャーとの直接の関わりは薄いことが課題である。
- 4) レクリエーションの充実について、個々の好みや体調に合わせた新しいメニューの開発を行った。また、初めての試みである作品展を開催し、好評いただいたため来年度にも引き続き行っていきたい。園芸はリハビリ職員の援助を得て実施したが、デイサービス職員内での育苗は十分でなかった。歌などのボランティアに来ていただいていたが、通年でのボランティアの活用を考える必要がある。